

95 ルーブル美術館の日本コレクション (2022年1月20日)

パリにあるフランスの国立の美術館はテーマごとに分散されており、原則として、日本を含むアジアの美術品は、ギメ東洋美術館が所蔵しています。しかし、実は、ルーブル美術館でも、日本の美術品を観ることができることをご存じでしょうか？

かつてルーブル美術館が所蔵していたアジアの美術品は、1945年以降にギメ東洋美術館へ移管されました。しかし、ルーブル美術館は現在でも約120点の日本の美術品を所蔵しています。これらは、主としてフランスの第二代大統領であったアドルフ・ティエール(1797-1877)や他の寄贈者のコレクションに含まれているものです。ティエール・コレクションは分散させないことを条件としてルーブル美術館に寄贈されたため、現在でも同美術館の工芸部門が所蔵しています。コレクションには、漆器、伊万里焼の磁器(注1)、象牙で作られた根付などがあります。



以前に、16世紀半ば以降から、ヨーロッパで日本の漆器が珍重されて、王侯貴族の中で漆器のコレクションが流行したことをご紹介しました(注2)。ルーブル美術館の展示室の中で、黒い漆と金を使った工芸品は、他の作品とは異なる豪華さがあります。それらは、漆パネルを含め、主に18世紀の家具です。そして、漆器のコレクションの中で一際目を引くのは、マリー=アントワネットのコレクションです。

マリー=アントワネットは、母マリア=テレジア女王から漆器を贈られたことがきっかけで漆器の魅力に取りつかれ、熱心に漆器を集めたと言われています。ルーブル美術館が所蔵するマリー=アントワネットの漆器コレクションには、机、水差し、硯箱などがあります。いずれも金箔を贅沢に使い、繊細で高度な職人の

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

技が生んだ作品で、目を見張るものばかりです。マリー=アントワネットは、ベルサイユ宮殿の中のプライベートルームに漆器を飾っていました。王妃にとって、漆器は他人に見せるためではなく、自分で楽しむためのもので、彼女が本当に漆器を愛していたことが分かります。



1789年10月にマリー=アントワネットを含む国王一家がパリに身柄を移された後、ベルサイユ宮殿には漆器のコレクションが残されました。フランス革命で処刑された元王妃のコレクションは行き場を失いかけてしまいましたが、質の高いコレクションは、1793年に開館したばかりのルーブル美術館に相応しいとして、革命派の反対を乗り越えて、1794年にフランス国家の所有となりました。



専門家によると、現存する88点のコレクションは、ルーブル美術館、ギメ東洋美術館とベルサイユ宮殿が所蔵しています。このうち、常設展示でこのコレクションを観ることができるのは、ルーブル美術館のみです（注3）。ルーブル美術館では、工芸部門の展示室で観ることができます。水差し（写真）は、現在開催中の「VENUS D'AILLEURS」展（2022年7月4日まで）（注4）で展示されています。18世紀に生きたマリー=アントワネットが愛した漆器は、今も私たちの目の前で輝きを放っています。

注1 83 海を渡った「IMARI」（伊万里焼）

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100246922.pdf>

注2 71 日本の漆器とフランスの金細工のマリアージュ

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100545637.pdf>

72 南蛮貿易と漆器

<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100545670.pdf>

注3 ベルサイユ宮殿では、王妃の居室のガイドツアーで見学可能。

注4 VENUS D'AILLEURS 展（FROM AFAR 展）

<https://www.louvre.fr/en/what-s-on/exhibitions/from-afar>（英語）